

[討論]

質問

たまたま私は一昨年レインボープランの調査をした。一点目として、レインボープランで私が感じた最大の弱点というのは流通だと思う。たとえばレインボープランの野菜も実際にはセルフサービスのスーパーなどで売られているから、他の地域から入ってきた野菜と同じ競争に入ってしまう。レインボープランの認証シールが貼ってあっても、結局価格が安くなければ、見映えがよくなければ売れないということになる。そこでレインボープランは先ほど挙げたような、ファーマーズマーケット、学校給食、加工食品などに販売ルートを見出している。レインボープランの物の価値は、循環、情報、地域社会への貢献・参画という価値であるから、それをセルフサービス店では伝えきれない。本来なら、こういう運動から出てきた農産物をどうしたいのか、どう消費者に伝えていくのか、ということが問われ、売る側のメッセージを細かく伝え、育てていかなければいけない。たとえば商品に付けたバーコードで由来や生産者の顔が出てくるような仕掛けと組み合わせたとき、レインボープランの野菜はどのような位置づけを得るのかということには興味を引かれる。

二点目に、レインボープランがこれだけ全国に注目され、多くの地域で同じようなことを試みがなされており、生ゴミの堆肥化というのはそれだけインパクトがある。なぜかと言えば一番身近で、だれでも接触できる自然だからだと思う。しかし、堆肥を使うのは高齢者であったり女性であったりして、さてこれで次の世代に伝わるのだろうか、つまり高齢者農業が次にまた再生産されるのだろうかということを考えさせられた。もっと大規模な専業農家も多く参画する必要があるだろう。

レインボープランのもうひとつの問題は、生ゴミ以外に自然と接するルートをどう作れるのかということだろう。生ゴミはひとつの手段だが、もう一つの手段として体験学習的な体験農業もあるだろうし、オーナー制度のように資金提供を含めるものもあるだろう。生ゴミというところから、次の段階ではちがうルートができれば、これは域内外に広がるプランになるだろうと思われる。

竹田

今の問題提起について、まず流通システムの弱点の部分は、私たちの背負っている課題であることは間違いない。レインボープランというのは市民総参加の事業であるということから、既存の流通業者を排除しない形で行うことを考えた。地方卸売市場と量販店、専門店などすべての流通業者が参加できるようにして流通体系を考えてきたが、それは生産量が一定以上確保された上で達成されるべきことだった。現時点でなかなか生産量が伸びていかない条件のなかで、いかに地域の消費者に届けるかについては、いま学校給食へ供給する食材を増やそうということと、指定取扱店に商品をダイレクトに送るといったシステムや、ファーマーズマーケットに象徴されるような、直売店を新しく作れないかといったように、既存の流通業者の思惑によって左右されないようなシステムで検討していきたいと考えている。一方、生産量の確保という問題に関しては、レインボープランで生産される堆肥の量からすると、レインボープランの認証をうける農産物の生産量も自ずと限界があり、レインボープランの農産物に関しては、原則的に地域内循環ということにしていきたい。しかしこれだけネームバリューを持ったレインボープランを活用しない手はないはずで、他の有機肥料を使った環境保護型農業を新たに立ち上げることも考えている。例えば、ダムの伐採木の堆肥化（現在進行中）や、畜糞尿の堆肥化である。さらにまだ手付かずの事業系生ゴミもあるので、これらをフル活用すれば、もっと堆肥の生産量を拡大できると思われる。こういったものにも長井のブランドをかぶせ、域外の農産物循

環を目指すものとして立ち上げることを検討している。

寒河江

消費者の立場でいうと、3シーズン常時入るような体制になっていない。生産者の立場からは、せっかく苦労して作っても、価格面で正当な評価が得られないという思い込みも影響していると思う。ただ先ほど述べたように、流通の簡素化を進めていけば、このようなデメリットは除いていけるだろう。

食と土の安全という面から見ると、生産者、消費者ともにこれに関する深い認識が欠けている面があると思う。従ってレインボー堆肥を投入すると土がどうなって食料との関係はどうか、このことをもっとわかりやすく数値化する必要があると思う。現在私たちは堆肥取締法の関係もあるが、窒素、リン、カリウムを中心とした数値しか表せないのも、もっとわかりやすい微量元素（銅、鉄、マンガン、モリブデン）についても正確に表示する取組みが必要かと思う。2001（平成13）年度から、重点事業として私たちは堆肥づくり、土作りの勉強会を地道に積み重ねているところである。生産者教育、消費者教育も重要な課題になっていくと思われる。直売所の整備と同時に、消費者の要望に応じて宅配などができるように、消費者への直納システムの充実も必要かと思われる。

司会

生ゴミ以外と自然と接するルートについてはどうか。

菅野

可能性としては様々なことがあると思うが、具体的に取り組む段階ではない。「菜の花プロジェクト」、あるいは廃油で車を動かすプロジェクトなども暮らしづくり、地域づくりにとって興味深い事業だが、まだ具体的にそれに参加するという手立てを持っていない。まず、いまのレインボープランを伸ばすことが課題である。

質問1

レインボープランは第二期が始まったばかりということで、先の話かと思うが、地域の範囲についてどう考えるか。地域の区切りは行政単位かと思うが、竹田氏の話にあったように、地域を越えて循環するためには、出て行くものと入っていくものとが最終的に一致しないと循環しきれなくなってしまう。ここで循環するのは農作物と堆肥の両方だと思うが、出て行くものと入ってくるものが、地域間で均衡できなくなったときにどうするか。そうしたときに、地域として捉える範囲を広げるのか。地域間の循環関係まで考えて議論を進めていくことが将来的に必要なと思われる。

その一方で、共同体とか人々の価値観、意識というものの求心力を考えると、拡大というのは困難さもあると思う。行政、市民、農業者それぞれの立場から言っても重要な問題かと思われるが、これをどう考えているか伺いたい。

質問2

5,000世帯の人々がほとんど協力しているということだが、取り組み始めた当初から皆にそのような意識があったのか。あるいは最初は少なかったが、だんだん意識が育まれ、参加者が増えたのだろうか。今日の報告では参加を促すインセンティブをつけるというより、人々の意識自体が育っていつ

たようだが、どのように意識がそだったのか。また、参加していない人もいるのか。

司会

質問をまとめると、地域の範囲の問題、5,000 世帯の意識形成プロセス、参加しない人々はどういう人か、それにかかわって外部評価についての問題ということになるだろう。

菅野

5,000 世帯の方々の参加自体には疑いはなかった。一番心配だったのは、分別の中味のことだった。分別の中味を良くするためにどうすればいいかということについて、さまざまな討議やモデル事業を行った。それでたどり着いたのが今のシステムである。家庭の段階で生ゴミを水切りバケツに入れてもらい、週 2 回、収集所にある 70 のコンテナバケツにあけるというシステムである。これがなぜいいかというと、お互いのゴミを見ることが出来るからである。すべて誰かが監視しているというのではなくて、長いゴミ出しの過程のなかで、だれの分別がよくて、誰の分別が悪いかというのがやがて人々の知るところになる。直接に指摘することはコミュニティーの人間関係にかかわることだが、周り近所のことを意識しながら少しでもいいゴミを出そうとすることが、このコミュニティーの中の人間関係をゴミ出しのシステムに結びつけている。5 年たった今も非常にいい分別が続いている。

生ゴミの分別が良い理由は、地道な話し合いの積み重ねがそれを可能にしたのではないかと思われる。シンポジウムを何回も重ね、それから公民館単位など、比較的小さな座談会もたくさん重ねた。他方で女性団体が紙芝居を作って子供たちを啓発し、女性団体主催の地域座談会なども数多く行った。

住民の参加がいいということについては、町の人たちは生ゴミの分別を加えて 11 分別でやっているが、ちり紙などは燃えるゴミとして出す。区別がつかないものは燃えるゴミとして出すことも可能である。生ゴミは週二回収集するが、燃えるゴミは週一回の収集しかなくしかも有料になるので、システム全体がその市民の生ゴミ分別を支援していくシステムになっていることもあろうかと思う。

竹田

地域の範囲については、レインボープランは行政単位ということで始めているため、予算執行の観点から現在の枠を超えるのは難しいかと思われる。ただ現在、市町村の合併問題が盛んに議論されているが、長井市においても市長自ら合併運動を進めているということもあり、合併が成立すれば当然今の長井市の枠を超えた、広い意味での地域ということになっていくだろうと思われる。米沢市やその周辺の 3 市 5 町を置賜地域と呼んでいる。そこに県の行政機関として置賜総合市庁というのがあつた。そこでも来年度の事業として、地域内の有機資源を循環システムに基づいて活用しようという学習会を立ち上げようとしている。そういうことから考えると将来、長井市を中心としたごく一部の市町村ではなくて、置賜地域という県南部を網羅した形になっていく可能性はある。また置賜総合市庁の事業対しては私たちが参加することになるので、生ごみだけに限らず、その他の有機資源を使った環境保護型農業、あるいは地域内循環を提唱していきたいと思う。

菅野

循環というのは物の流れのように見えて、実は人と人とのつながりである。特に難しいのは循環というのは全部が上手く行ってはじめて回りだすことで、どこかに淀みができるとう全体がストップする。たとえば生ゴミからいい堆肥を作り出すところまでは上手く行った、これはシステムの問題だった。

ところがそれを活用するかどうかはシステムの問題ではなく農家の自由意志の問題である。農家がレインボープランの価値を認めなければ堆肥が消費されないし、消費者がレインボープラン農産物の価値を認めなければ、農産物は消費されない。一方通行とちがい、全体が上手く行かないとよどみが出来て循環しないという難しさがある。そこを回すのは人と人との関係である。

質問

質問の第一点は、目標をどこに設定しているのかということである。ゴミの処理が目標であれば、ゴミの全量がこういう形で処理されたということで目標に到達したということになると思うが、レインボープランの目的はゴミの処理ではないとのことだった。本来の目的は循環型の関係をつくることである。

ところで 1980、90 年代の有機農業運動が到達したひとつの結論として、有機農業の持っている大きな限界性があると思う。具体的にいえば、有機農業は特定の条件を持った農家が、特定の条件を持った土地を使う限りにおいては広がるけれども、それを越えては広がらないという問題である。有機農業ですら、生産に手間をかけられる農家、あるいは米の単作地帯で土壤整備が行き届いて乾田化ができるような転作地に限られるといったように、どうしても部分でしかない。

今日の報告のなかでもあったように、レインボープランは、なかなか参画する農家数が広がっていかないということもあると思うが、ある部分をもって現代の社会に問題提起を続ける運動なのか、それとも、ある種地域農業全体を循環型にかえ、願わくばそれが全国に広がって日本の農業のあり方が循環型に変わっていくといったような将来を見据えたものなのか。目標の設定によってどこまで到達したのかという評価は非常に違ってくると思うが、その点を教えていただきたい。

二点目は、堆肥作りや認証制度は、どの地域でもすでに多くの事例があると思うが、その場合、地域のリーダーシップを取る方々の性格が、それぞれの運動の位置づけや性格付けに重要な意味を持つと思う。長井の場合では菅野氏、竹田氏などの担い手は団塊の世代である。その世代がリーダーシップを取っているのは全国的に有機農業運動から見るとやや若い地域になると思う。米の単作地域で、団塊の世代が大体高校卒業して農業に入る時期までは、米価が急激に上がり農家の生活は良く後継者も確保されていた。しかし彼らが農業に入ったところ、1968 年から米が過剰化し、70 年には転作に入る。そして、何らかの転作の作物を入れなければならなくなったときに、米単作地帯の農家の後継ぎの若者たちの間でどのように次の方向を目指すのか、という問題意識は当然育ったと思う。70 年代 80 年代にあったのは生協を中心とした産直運動であった。それが 80 年代の後半に入ると、産直では事態を開きできないという状況がでてくる。そういう中で産直による安くかつ新鮮にというところから転換して、有機という中味を限定した運動に変わって行ったようなところがあると思う。お二人が運動を起こそうとした際に、産直運動や地域の農業構想をどのように考えたかということをお伺いしたい。

竹田

確かに、昭和 45 (1970) 年から始まった減反政策は、今までの米の増産計画からするとかなり唐突な計画だったことは間違いないが、私が高校を卒業する頃はすでに過剰基調になっていた。米の消費量が減っているのに無理な増産計画があったという、ミスマッチが減反政策につながったということはわかっていた。それで消費量が以後ギリ貧になっていくことを想定したときに、米に特化した農業経営では将来は決して明るいものにならない、ましてや米価が不安定なることも容易に想定できた。

その時に、これから日本人は食の豊かさを求めていこうと、そのためには数多くの食材として野菜、それも旬ばかりではなく、促成、抑制といったものを含めた栽培技術とあわせた供給体制というものに労力を向けるべきだと考え、いち早く私が取組んだのは、減反政策を上手く活用したイチゴの栽培と、市場への直接納入による利益の拡大であった。それが現在、私の畑作中心の農業経営に役立っている。そういう意味では、今の農村の置かれている現状に似たような状況はすでに経験している。

レインボープランの目標はどこに設定しているのかということについては、かなり大きなテーマかと思う。私たちが近々の課題としているのは、生産拡大と流通の整備であるが、これは当面の目標でしかない。その先をどこに置くか。究極的にはまちづくりであり、人間と人間のコミュニケーションがもっと広がり、あるいは農業で長井を語るのではなく、他の産業と協調体制をとった総合的なまちに作り上げて行きたいというのがある。それを達成した上で、レインボープランのような循環システムを導入する他の市町村との連携を深めていきたいと思うが、そこまで戦略的な計画やビジョンはまだ設定していない。

菅野

質問の一点目に関しては、有機農業が一部の農家にしか取組めないということは、これからの時代には合わないだろう。有機農業を引き継いでくれた農家には敬意を表すが、これからは誰でも参画できるところで展開させるのが課題だと思う。レインボープランの認証制度もそこから離れてはいない。誰でもが今持っている自前の技術で参画し、土の力に対する確信や自分の腕に対する自信などがついた度合いに応じて、少しずつケミカルから離れていけるようなプロセスを大事にしている。

もうひとつは、地域社会と地域農業の結合によって、足元の市場をどれだけ自分たちが掌握できるかということだと思う。地元の市場にアグリビジネスの農産物がどんどん入っていて、都市には有機農業のいい物が回ってしまっている。

理念性の高い農家と、理念性の高い消費者がよい関係になるということを超えて、やはり、足元の市場から、農のある暮らしの安定性というものを実現していきたい。モザイク的な結合として日本列島が形成されたとき、つまり地域社会農業という形でそれぞれの農業が形成されたときに、日本全体は自給率の高い、そして農業に依存する、健康な社会になっていくのではないかなと思う。

質問

5,000世帯の人々が参加し、そのこと自体についてはほとんど疑いがなかったという菅野氏の話は、都市部の市民運動を研究している私としては驚くべきことだ。

ある運動に対する住民の参加には何らかの動機があると思う。たとえば元々ある種の人間関係があって、その人間関係が移行するかたちで沢山の人が参加していく形態とか、運動の価値原理に共感を持って参画するもの、あるいは利益とか、役に立つから参加をするというのがある。今日もその3つにかかわって、それぞれインセンティブがあったということだった。たとえば、生ゴミとして出すと週2回の収集で無料だが、一般のゴミとして出すと週1回の収集で有料になるので、生ゴミとして出すほうにインセンティブが働くなどがあった。

もともとある人間集団・つながりという要素、価値や原理に対する共感という要素、それから利益になる・自分にとって得になるという要素、この3つの中でどの要素が決定的であったかという問題を解いけば、私たちがこれから考える市民参加型の社会についての何らかの示唆が得られるのではないかなと思われる。

二点目は、菅野氏の話にあった大変印象深い言葉として、行政が動きやすい環境や参加しやすい環境を市民が作るという言葉があった。これは通常、行政がいかにして市民が動きやすい、市民が参加しやすい環境を作るかという方が一般的であり、それとの関係が全く逆で大変興味深かったのである。ではこのレインボープランということに関して、行政は逆に何が出来るのがということが問題になる。レインボープランのなかで行政固有の役割というのはどのようなものになるのか伺いたい。

寒河江

行政の担い手としては生ゴミの回収、堆肥センターの稼働の面で参画している。行政の旧来型の価値観では、あると市民にゆだねるよりは市民を統治するという方向に収束させる形であった。これまで行政からトップダウン的に市民にお願いしたかなりの部分で、財政面だけでなく、様々なノウハウという面でも行政には行き詰まりが生じていると思う。行政がどういった分野を分担できるのか、そして民間がどういった文化を担っていきけるのかの色分けをしながら、まちづくりを進めていくことが必要だと思う。

横山（レインボープラン推進協議会会長）

長井の地域、風土そしてレインボープランの理念の確かさにおいて、どれがひとつ突出しているということではなく、市民皆で町を作っていくという一種の流れが積み重なっていて、その上にレインボープランが出来上がったといえる。リーダーが存在し、それを支える方々がいるから一般の市民も参画できた、というような背景がある。

菅野

レインボープランに17年間携わっていると、プランを支える4種類の間が必要だと思える。人々が本気で参画するためには求心力が形成されなければならない。求心力の真ん中に人々が集まるような物語がなくてはならないようだ。その物語を形成できるのは4種類の間で、よく言われるように、若者であり、よそ者であり、女性である。これに加えて、目先の利益とか損得で動かないバカな人間がいないと求心力が形成されない。今の日本は、小利口な人間とか小馬鹿な人間しか作れなくなってしまい、本気でやってるんだという大きな馬鹿を作り出せなくなっているところに最大の危機があるのではないか。

2つ目に、私は墓のある地域が日本を変えようと思っている。やはり東京のような大都市は、自分たちの子孫の未来と、地域の未来は二重映しにはなっていない。ここで環境の問題をいくら主張しても、地球が...というところからでしか話は始まっていかない。ところが私たちの墓のある所は先祖代々住んでいるところであり、地域の未来と子孫の未来が重なって了解できる。そこで環境を荒らすことはやはりできない。環境の問題で先進的に変わっていくのはそういう地域だろうと思われる。やがて東京、大阪などの大都市を包囲し、だんだんと大都會の中に呼応する人が増加する形で、大都市は最後が変わっていくのであろうと思われる。

意見

私はドイツからの留学生だが、先ほど何故ドイツにはレインボープランのような取り組みがないかという質問があったが、それについては私自身も特に意識はしていなかった。例えば大都會の場合は自分の食べ残し、あるいは生ゴミは、どこへ行っても自分の食生活には全く影響しない。田舎の方で

は自宅にコンポストコーナーを持っていてもそれを使うことに関して、特に問題意識は持っていない。
ただ、生ゴミとその堆肥化のプランを、コミュニティ作りもしくはコミュニティ強化のための一手段として利用するのは非常にユニークかと思う。

<記録：飯窪秀樹>